母校の近況

並んだ国公立と私立

― 大学進学状況 ―

進路課長　加藤英宏

四年間のデータに示される特徴は、合格延数の減少に対して進学実数は増加傾向ということである。年毎に変化する国公立の入試制度を反映した結果である。平成元年より連続方式に分離・分割方式が並行するという複雑な入試方式である。特に分離・分割の拡大が複数合格の減少となり、国公立一本勝負の色彩を強くしている。進路指導も毎年変化する入試制度の対応に追われているのが実情である。

今年度は指定校制を中心とした推薦入学者が卒業生の一割を越えたことが特色の一つである。指定校の依頼は、四〇大学五三学部、応募は推薦条件が厳しいということもあって、二一大学三〇学部であった。指定校制の合格率は一〇〇%であるが、一般公募制の場合は低率である。大学としても優秀な生徒を早く確保したいという意図がある。一般受験の合格率は、国公立の約五〇%に対して、私立は約二五%である。「国易私難」は全国的傾向であり、本校では「国合私落」という現象が毎年みられる。私立はすべり止めという考え方は認識不足というべきである。従来、進学実数において常に国公立が私立をリードしていたが、今年度は両者がほぼ並んだことがもう一つの特色である。とりわけ国私合格者で私立へ入学したものが十一名もいる。

現浪の合格延数に本校の志望動向が端的に表現されている。国公立の場合、静岡・県立・名古屋の三大学で合格延数の七割を占め、北海道大学から琉球大学まで合格はしているけれど、数の上では意外と地元指向性が強い。能力と適性の観点から全国的な視野で入りたい大学を選択したいものである。私立の場合は早稲田を筆頭とするベスト一〇校で合格延数の五割を占める。難関私立を中心とした首都圏指向は例年どおりである。本校生徒のプライドが受験校を限定している面がある。今年も一校以上合格したが、合格校を不満として、一三名が厳しい浪人生活の道を選んでいる。少数であるが男子は大学校や専門校、女子は短大を四大受験の方向転換として受験している。

本校は入学当初から全員が四年制大学を希望するという典型的な進学校である。今年度の進路別実数の概況は、国公立大学私立大学、進学準備の三者がほぼ等分される結果となった。今年度も進学準備とする浪人が三割台、予備校通学は大学進学以上の経済負担を家庭にかけることになる。多くは一浪して成果をあげているが、在学中における学習の蓄積に欠けると二浪以上の可能性がある。ただ東高に入学すれば、いい大学に行けるとは幻想というべきである。より努力することが求められていることを生徒達に自覚させたい。あこがれを具体化する高校生活の充実が大学進学という結果でありたい。三〇校余の中学校から選抜されて入学してくる生徒達、それぞれがすばらしい可能性を秘めていることは確かである。生徒達の可能性を引き出すという本来的な教育の実践が結果として進学実績につながるのである。

（平2・5・3記）

1. 大学等合格者延数

区分＼卒業	2年3月		元年3月		63年3月		62年3月	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
国立大学	130	64	144	80	181	67	171	85
公立大学	27	18	31	15	38	7	48	21
私立大学	223	248	197	253	187	192	267	211
短期大学	10	2	6	2	8	4	9	6
準大・専門校	6	3	6	5	4	7	10	1
計	396	335	384	355	418	277	505	324

2. 卒業生の進路別実数

（）内は、うち女子数

進路＼卒業	2年3月	元年3月	63年3月	62年3月
国公立大進学	117(31)	121(35)	143(41)	140(35)
私立大進学	115(31)	97(31)	75(26)	101(19)
短期大進学	6(6)	2(2)	2(2)	4(4)
準大・専門校進学	4(0)	6(1)	4(0)	10(3)
進学者（小計）	242(68)	226(69)	224(69)	255(61)
留学予定		2(1)		3(2)
就職者	1(0)	2(0)	2(1)	3(1)
進学準備者（浪人）	135(24)	146(19)	152(13)	123(14)
計（卒業生数）	378(92)	376(89)	378(83)	384(78)

3. 平成2年度大学別合格者数一覧

北海道	5	東京	3	富山医	1	大阪外	1	都留文	1	上智	2	東洋	6		
旭川医	1	東医歯	2	金沢	7	島根医	1	静県立	26	昭和薬	3	日本	32		
弘前	4	東外語	2	福井	2	岡山	3	大阪府	1	成蹊	7	法政	23		
東北	8	東学芸	5	山梨	8	広島	1	防衛大	2	成城	3	明治	32		
秋田	2	東農工	3	信州	5	徳島	1	独協	3	専修	11	明治学	7		
山形	1	東京工	1	岐阜	1	愛媛	1	青山	9	大東文	4	立教	7		
茨城	4	東京芸	2	静岡	50	九州	1	学習院	5	中央	27	早稲田	35		
筑波	4	東商船	2	浜松医	4	鹿児島	1	慶応	17	東京経	11	愛知学	6		
宇都宮	2	東水産	1	名古屋	10	琉球	2	工学院	4	東京女	5	南山	2		
群馬	1	一橋	2	名工業	1	高崎経	1	国学院	5	東電機	7	同志社	4		
千葉	8	横浜国	8	豊橋科	1	東京都	7	ICU	2	東農業	4	立命館	16		
埼玉	6	新潟	7	滋賀	1	都科技	1	駒沢	7	東薬科	5	関西学	2		
電気通	3	富山	3	京都	1	横浜市	7	芝浦工	12	東理科	16	他大学	149		

―部活動―

サッカー部　中部を制し県大会へ

去る五月六日、サッカー部が中部大会優勝を手にし、県大会出場を決めた。部長の前田仁崇君は

「みんな頑張ってくれた結果だと思う。県大会へのワンステップにしたい」

と語っていた。

現在、サッカー部は県大会を目標にして、パス、シュート、ヘディングなどの基本的な練習を続ける毎日である。今年は勝負強いチームということで、県大会での活躍を大いに期待したい。

・中部大会決勝トーナメント

一回戦　藤枝東3―1静岡学園

準決勝　藤枝東3―0静清工

決勝　藤枝東2―0東海大一

県大会出場へ

九部活

サッカー部

男子バスケット部

卓球部団体戦

シングルス

バドミントン団体戦

シングルス

ダブルス

陸上部四百メートルリレー

千六百メートルリレー

走り幅飛び

剣道部団体戦

個人戦

柔道部団体戦

個人戦

弓道部個人戦

男子バレー部

新聞部　全国大会で優秀賞

全国高校の学校新聞作りを競う「八九全国高校新聞コンクール」（大東文化大学主催、文部省、朝日新聞社後援）で本校新聞部による「藤枝東高新聞」が優秀賞に入賞した。今回は全国から二百三十六校の応募があり、文部大臣賞など十一の入賞校が選出されたもので、本校の優秀賞は四番目にあたる。

本校新聞部は、百六十二号を応募し、藤枝市内の薮田川に生息するカワバタモロコと磐田市の桶ケ谷沼のとんぼの保護運動を現地ルポ。また、生徒会活動について取り上げ、本校の卒業生で初代の生徒会長でもあった作家小川国夫氏へのインタビューを交えて、生徒会の在り方を問いかけている。

本校の新聞部は昨年夏に松崎町で二泊三日の合宿をした。記事は足で書けと熱っぽく議論し、同町の顔に当たる人を半日で捜し出して取材するなどの積極的な活動訓練もしている。

受賞理由としては、タブロイド版ながらも情報量が豊富で、かつすっきりとした編集ぶりである点が上げられていた。

演劇部好演

第六回島田・金谷・藤枝地区高校演劇発表会が島田プラザおおるりで行われ、東高演劇部は、「祭りよ、今宵だけは哀しげに―銀河鉄道と夜」を上演した。審査員から「今年から傾向が変わり、今後が楽しみだ」という言葉をもらった。

本校の演劇部は、県下でもトップレベルにあり、脚本も自分達で創作することもあり、啓発力のある楽しみな部活である。

生徒の自主活動も活発

学校行事である千南祭や体育祭は、生徒が最も意欲をもって取り組んでいて、青春の活力に満ちている。特に千南祭の初日に三年生の各クラスによって演じられる「夢の祭典」は、半年以上も前から脚本を作り、準備する熱の入れようである。これには審査があり、各クラスとも優勝を目指して激しい火花を散らし演じる。まさに、東高の伝統となっている。機会があれば是非ご覧ください。今年の千南祭は六月十六・十七で夢祭は十六日の午前中に行われます。体育大会は九月二十一日です。

それは若い一人の校長の英断で始まった

「サッカーの町藤枝」の企画展　～市郷土博物館で～

蓮華寺池のほとりの、藤枝市郷土博物館で、三月十七日～五月十三日の二ヶ月間にわたり「サッカーの町・ふじえだ」の企画展が開催された。この企画の中心となったのが、学芸員の鈴村路子さんで同窓生でもある。

冒頭の見出しは、志太中学（大正十三年創立）の初代校長の錦織兵三郎先生が当時盛んであった野球でなく、「蹴球」を校技として全生徒に練習させ、サッカーの町藤枝の礎を作った英断を指している。彼女が苦心して考えた言葉である。彼女に今回の企画について聞いてみた。

◎企画の動機は何でしたか。

「藤枝という町も東高もサッカーというものがなかったら、全国に名を知られることもなく地方の一都市とそこにある普通の高校で終わってしまったでしょう。静岡のサッカーの原点が藤枝にあるということを、博物館の展示によって、藤枝の昭和の歴史の一部として、昔を知らない皆さんに見ていただきたいのです。歴史にはなっても、伝説にはしたくないと思ったからです。昔は強かったというのでなく、これからにつなげるという意味で、大正十三年からの歴史をたどってみたのです。」

◎博物館の企画としてスポーツを扱うのは珍しいですね。

「そうですね。スポーツを市の歴史の一部として博物館で展示するのは、公立の博物館では初めてかもしれませんね。そして、私のように戦国時代が専門の者が扱うのも」

◎資料を集めながら改めて気付いたことはありますか。

「サッカー六十周年などの本で見たりはしていても、自分が東高に在学した当時のことしか知らないのです。戦前にもこんなに素晴らしい成績をあげていたとは知りませんでした。またこの地方都市で、オリンピックに戦前戦後を通じて四人もの選手が出場し、銅メダルを取った方もいることにも改めて驚きを感じました。また話には聞いていた三冠王のことも、八ミリフィルムをビデオにおこしたものを見たり、その当時の方々からもお話しをうかがったりして具体的にわかってきました。」

◎都市にはそれぞれの色合いがありますが、藤枝については。

「そうですね、サッカー最中が他の土地では絶対に考えられないように、いたるところに見られる藤色もこの町ならではのものでしょう。藤枝の地名からとった藤色も、東高のサッカーのユニホームのカラーとして、全国的な活躍とともに、町の色として多くの人の意識に染み透ったようです。お見合いの席でさえも、藤枝に住んでいますと言えば、『あっ、サッカーの町ですね』と話の糸口がつかめるのですから。こうなりますと、単なるスポーツを通り越して生活文化になっていますよ。」

◎最後にひとこと

「私のような素人が、今回の企画にサッカーをとりあげたのは、次の時代を担う若い人が興味を持つものを扱い、博物館を見てもらい歴史的な視点から自分の住む郷土を見返すことがないと、発展性がないと思ったからです。今回は歴史的な背景を通して整理しましたが、今度機会があれば『蹴る』という視点で扱ってみたいと思います。それにしても、東高生は来てくれなかったですね。自分の学校の歴史を見直すことも大事なのですが……。ご協力、ご来館いただいた多くの同窓生のみなさんに感謝しています。」